

## 第三章 阮籍「詠懷詩」にみる空間の特質 (二)

―「場」への意識を中心として

一、

八十二首の「詠懷詩」を見渡すと、実に多くの篇にわたって、生きる苦悩が詠われている。阮籍以前、例えば、「古詩十九首」や建安の詩にも、「詠懷詩」と同じように人生への憂いが吐露されている。しかし、阮籍「詠懷詩」とこれらを比べてみると、少なからず違いがあることに気づく。

既に、先に見たように吉川氏あるいは大上氏はその論著において、「詠懷詩」に詠われた苦悩をさまざま側面から論じられているが、本章では、「古詩十九首」あるいは建安の詩を比較対象として取り上げ、「詠懷詩」に詠まれた逃避という行為から浮かび上がる「場」について見ていく。そして、そこから見えてくる「詠懷詩」に詠出された、人間界（俗世）に生きる主人公の苦悩、李善のことばを借りれば「憂生の嗟」の深さを明らかにしたい。

本章では、時間と空間の関係から主人公が生きる世界―人間界―について見ていく。

二、

阮籍「詠懷詩」其三を挙げよう。詩の後半に逃避への願望が詠まれる。別世界へ逃避願望は「詠懷詩」に多く詠まれ、一つの特徴となっている。

嘉樹下成蹊	嘉樹 下に蹊を成す
東園桃與李	東園に桃と李とあり
秋風吹飛藿	秋風 飛藿を吹けば
零落從此始	零落 此従り始まる

繁華有憔悴  
 堂上生荆杞  
 驅馬舍之去  
 去上西山趾  
 一身不自保  
 何況戀妻子  
 凝霜被野草  
 歲暮亦云已

はんか しやうすいあ  
 繁華に憔悴有り  
 どうじやう けいき しやう  
 堂上に荆杞を生ず  
 うま か これ す  
 馬を駆りて之を捨て去り  
 さいせいざん ふもとのぼ  
 去つて西山の趾に上る  
 いっしん みずか やすん  
 一身すら自ら保ぜざるに  
 なん いわん さいし こ  
 何ぞ況や妻子を恋いんや  
 ぎやうそく やそく おお  
 凝霜 野草を被う  
 とし く またここ や  
 歳 暮れて亦云に已みぬ

嘉樹である桃と李はしかし、いずれ枯れてしまい魅力を失う。生から死に転ずるその瞬間に「秋風 飛糞を吹く」という情景を置き、軽々と舞う枯葉の様に生命の脆さをイメージさせる。『史記』李広伝に見える諺、「桃李 言わざれど、下 自ら蹊を成す」を用い、桃と李を賞賛しつつも、しかしそれがやがて零落するものであると意識させる。繁榮は憔悴と表裏をなし、立派な屋敷もいつか廃れ、雑草に覆われてしまう。永遠に持続する営みなどは存在せず、望ましいものはいずれ姿かたちを変え、全ての物は美から醜へ、盛から衰へと移り変わっていく、と詠じる。

続く第七句から第十句では、「西山の趾」へ逃避したいという願望が詠まれる。「之」とは、すなわち冒頭六句によつて詠まれた零落していく世界に他ならない。そこからの逃避先である「西山」は、『文選』李善注によれば「夷、斉の居る所」すなわち「彼の西山に登りて、其の薇を采る」と歌いながら伯夷、叔斉が隠遁した首陽山を指すという。道が行われていない世から逃れ、伯夷、叔斉がたどり着いた、いわば世から隔離された、現実の影響を受けない世界への逃避願望である。

この詩は、「西山」へ逃避する願望を詠うが、その逃避の原点、起点に目を向けると、そこにある一つの「場」が浮かび上がる。それは、第七句に見える「之」によつて指差されたものである。その「場」に主人公はいま身を置き、そこから空間的に距離を置いた「西山」への逃避を志向する。ここでの逃避は、自らが生きる「場」を苦悩にあふれるものとして強く意識するところから生まれている。

其七十四を挙げよう。

猗歎上世士  
 恬淡志安貧  
 季葉道陵遲

うるわ かな じやうせい し  
 猗しき歎 上世の士  
 てんたん ころろせし ひん やす  
 恬淡として 志 は貧に安んず  
 きやう みち りやうち  
 季葉 道 陵遲すれば

馳驚紛垢塵  
甯子豈不類  
楊歌誰肯殉  
栖栖非我偶  
徨徨非己倫  
咄嗟榮辱事  
去來味道眞  
道眞信可娛  
清潔存精神  
巢由抗高節  
從此適河濱

馳驚して垢塵に紛る  
甯子 豈類せざらんや  
楊歌 誰か肯て殉わん  
栖栖たるは我が偶に非ず  
徨徨たるは己が倫に非ず  
咄嗟 榮辱の事  
去來して道眞を味わう  
道眞 信にして娛しむべし  
清潔 精神を存す  
巢と由は高節を抗ぐ  
此に従いて河浜に適かん

ここでは、冒頭二句において、無欲で清貧を楽しんだ「上世」の人々に対する憧憬が詠われる。具体的に意識されたのは楊朱、巢父、許由である。一方で末の世（季葉）の人々の生き方に対しては批判的である。「栖栖」すなわち時勢において汲々として走り回る輩、「徨徨」すなわち小賢しい生き方をするつまらない者、それらは嫌悪の対象として捉えられる。具体的には、甯戚を挙げる。『呂氏春秋』によれば、牛の角を叩いて、歌いながら官位を求めた人物であるという<sup>二</sup>。

第十、十一句に見える「道眞」一語は、『莊子』讓王篇に見える下記の一節に基づく。

故曰道之眞以治身、其緒餘以爲國家、其土苴以治天下。由此觀之、帝王之功、聖人之餘事也、非所以完身養生也。今世俗之君子、多危身棄生以殉物、豈不悲哉。

故に曰く、道の眞以て身を治め、其の緒余以て國家を爲め、其の土苴以て天下を治む、と。此に由りて之を觀れば、帝王の功は、聖人の余事なり、以て身を完うし生を養う所に非ざるなり。今の世俗の君子、多くは身を危うくし生を棄て以て物に殉う、豈に悲しからずや。

『莊子』における「治身」とは、個人的な「身を完うし生を養う」ことである。最優先すべきは自らの生命を全うすることであり、「聖人」はそのことに「道の眞」を用いる。そして、天下を治めるのに使うエネルギーは、その残りかすで充分であるとす<sup>三〇</sup>。

阮詩では、俗世における「榮辱の事」に汲々とするのではなく、『莊子』に掲げられた「身を完うし生を養う」ことに安んじ、清らかな「精神」を保ちながら生きることをよしとする。巢父、許由に思いを馳せ、彼らが暮らした「河浜」に逃避したいという願望を詠い、結びとした。

ここでは、主人公がいま身を置く「場」から空間においてのみではなく、時間においても距離をとった「上世」、とりわけ巢父、許由が生きた世界としての「河浜」に思いを馳せ、そうした世界を逃避先に選んでいる。ここにおいても、逃避はいま自らを取り巻く環境を嫌悪の対象として捉えるところに生まれている。

このように、「詠懐詩」に詠まれた逃避は、ある事物や現象に対する嫌悪に基づくものであることが多い。そのとき、そうした嫌悪する事物や現象が形作るある一つの「場」が浮かび上がる。阮詩が詠うのは、こうした「場」からの逃避である。

八十二篇の「詠懐詩」の中で、自らがいま身を置く「場」への嫌悪が逃避という願望に収れんされる作品は他にも見られる。その際、逃避先として神仙世界を挙げる頻度をもっとも高い。瀛洲（二十四）、太華山（其二十二）、列仙岨（其三十五）、雲湄（其四十）、青雲中（其四十三）、玉山下（其五十七）、荒裔（其五十八）、清都（其六十八）、瀛洲・明光（其七十三）、射山阿（其七十八）、崑崙（其七十九）などがある。

神仙への渴望は古来より詩歌に詠われてきた。しかし、「詠懐詩」に描き出された神仙世界の様相は従前のものとは少し趣向が異なる。阮詩の場合、神仙世界は時間から解放された不老不死の世界としてだけではなく、第二章で見たように、俗世―主人公がいまいる「場」から隔絶された世界として描かれている特徴をも持ち合わせている。

神仙世界の他にも、「東陵」（其六、其六十六）、（漁父）「乘流泛輕舟」（其三十二）、「東皋陽」（其三十四）、「河上」（五十九）などを理想として詠う。東陵は、東陵侯であった召平という者が布衣となったのちに生活を営んだ地である<sup>四</sup>。漁父は、『莊子』や『楚辞』に登場する隠者である<sup>五</sup>。世俗的な価値（「榮辱の事」）を超えて生きる人物であることにおいて共通する。彼らが生活を営んだ田野、河川は、世俗的な生活から切り離された地であるといえよう。

このように八十二篇を見渡してみると、その逃避先は山中、上古、仙界、田野、あるいは河川など多種多様である。逃避の起点となる主人公が生きる「場」は、「名利場」（其二十八）や「季葉」（其七十四）といった言葉で捉えられ、苦悩の対象として意識される。「詠懐詩」に詠われたのは、主人公がいま生きるこうした「場」から、空間においてあるいは時間において異なる世界―神仙世界、隱逸世界、方外へ逃避したいという願望なのである。

「詠懐詩」に描き出された嫌悪を生み出すものとして強く意識された「場」は、更にはどのような特徴が見られるだろうか。その特徴は後述するとして、その前に、従来の作品において、苦悩の対象として意識されたものについて確認しておく。

三、

「詠懐詩」が詠う苦悩は、主人公がいま生きる「場」を対象として意識するところに生まれている。これに対して、従前の作品、例えば、「古詩十九首」と建安の詩に詠われた苦悩の多くは、時間の推移を意識するところに生まれている<sup>六</sup>。まず「古詩十九首」其十三（『文選』卷二十九）を挙げる。

驅車 <sup>くろま</sup> 上東門 <sup>じやうとうもん</sup> に驅 <sup>か</sup> りて	遙望 <sup>はる</sup> 郭北 <sup>かくほく</sup> の墓 <sup>はか</sup> を望 <sup>のぞ</sup> む
白楊 <sup>はくよう</sup> 何 <sup>なん</sup> 蕭蕭 <sup>しやうしやう</sup>	松柏 <sup>しょうはく</sup> 夾 <sup>くわ</sup> 廣路 <sup>かうろ</sup>
下有 <sup>した</sup> 陳死人 <sup>ちんしひとあ</sup>	杳杳 <sup>しやうしやう</sup> 即 <sup>すなは</sup> 長暮 <sup>ちやうぼ</sup>
潛寐 <sup>せんさい</sup> 黃泉 <sup>かうせん</sup> 下 <sup>かた</sup>	千載 <sup>せんざい</sup> 永 <sup>なが</sup> 不 <sup>さ</sup> 寤 <sup>さ</sup>
浩浩 <sup>かうかう</sup> 陰陽 <sup>いんよう</sup> 移 <sup>うつ</sup>	人命 <sup>ねんめい</sup> 如 <sup>ごと</sup> 朝露 <sup>ちやうろ</sup>
人生 <sup>じんせい</sup> 忽 <sup>ごと</sup> 如 <sup>ごと</sup> 寄 <sup>やどり</sup>	壽 <sup>すい</sup> 無 <sup>な</sup> 金石 <sup>きんせき</sup> 固 <sup>かた</sup>
萬歲 <sup>ばんさい</sup> 更 <sup>ごと</sup> 相送 <sup>あひま</sup>	聖賢 <sup>せいけん</sup> 莫 <sup>も</sup> 能 <sup>な</sup> 度 <sup>た</sup> ゆ <sup>る</sup>
服食 <sup>ふくじよく</sup> 求 <sup>もと</sup> 神仙 <sup>しんせん</sup>	多 <sup>おほ</sup> 爲 <sup>くすり</sup> 藥 <sup>あやま</sup> 所 <sup>ところ</sup> 誤 <sup>あ</sup>
不如 <sup>しか</sup> 飲 <sup>の</sup> 美酒 <sup>びしゆ</sup>	被 <sup>が</sup> 服 <sup>ふく</sup> 紈 <sup>わん</sup> 與 <sup>と</sup> 素 <sup>そ</sup>

車を駆り、出かけていく。しかし、出かけた先で「北墓」「白楊」「松柏」と死を喚起する事物ばかりが目に入る。辺りの風景から、下に眠る黄泉の人々が連想され、生命の儚さが思われる。「浩浩として陰陽は移り」「年命は朝露の如し」「人生は忽として寄の如く」「寿に金石の固き無し」と、四つの常套句を重ね、過ぎ行く時間、儚い命への慨嘆が述べられる。「神仙」のような永遠の営みは不可能であり、儚い生を嘆きつつ、最後の四句に一つの生き方を詠出する。おいしい「美酒」を飲み、美しい「紈と素」を羽織るといふように、現世における享樂に関心を示す。享樂的な生き方に意が向けられたのは、直前に吐露された、限られた時間を生きる人の悲しみを意識したために他ならない。

次に挙げる其十五も冒頭四句においても、現世的快樂の追求を説き勧める。

生年不滿百  
常懷千歲憂  
晝短苦夜長  
何不秉燭遊

生年せいねん 百ひやくに満みたずして  
常つねに千せん歳の憂うれいを懷いだく  
晝ひる短みじかく夜はなは長よるきに苦なしむ  
何なんぞ燭しよくを乗りて遊あそばざる

作品全体は、儚い生への嘆き、登仙への諦念、人生を楽しむべき趣向などを詠う。表現及び作品の展開の詳細こそ異なるが、先に挙げた其十三と趣旨はほぼ同じである。移ろいやすい人の生にありながら、あれこれと案ずるよりも楽しく生きることに向けられている。人生が百年にも満たないということを意識することによって、目先の楽しみが思われたのである。

また同じく其十一においても、

人生非金石  
豈能長壽考  
奄忽隨物化  
榮名以爲寶

人生じんせいは金石きんせきに非あらず  
豈あよ能とこしえく長じゆこうに壽考じゆこうならんや  
奄えん忽こつにして物ものに隨したがいて化かし  
榮名えいめい以もつて宝たからと為なす

と人生の儚さ、不老長寿への諦念を詠う。ここでは「美酒」の代わりに「榮名」が求められている。

「古詩十九首」では、「美酒」を飲み、「紈と素」を羽織り、「燭」を手に夜に遊び、「榮名」を追求する生き方が詠われる。永遠ではない人間の営みにあって、人の欲望

を積極的に肯定し、追求しようとした。ちなみに、ここで意が向けられた生き方はいずれも「詠懐詩」の中で否定されるものばかりである。

時代が下って建安、曹丕「芙蓉池の作」(『文選』卷二十二)の中においても、「古詩十九首」に見られるような、儂い人生であるからこそ今を楽しめといった趣向が見て取れる。それが窺われる最後の四句を挙げる。

壽命非松喬  
誰能得神仙  
遨遊快心意  
保己終百年

壽命は松喬に非ず  
誰か能く神仙たるを得ん  
遨遊して心意を快くし  
己を保ちて百年を終えん

芙蓉池とは、魏の鄴城の西園にあった池であり、前半はそのほとりの美しい景観を描く。ここでは、神仙としての永遠の生命に期待をかけることなく、百年という限られた生であればこそ、今このときの遊興に喜びを見いだそうと詠う。この四句は、遊覧の充実感を際立たせているとともに、古詩に通じる享樂的価値観の表出であるといえよう。限定された生を意識することが、こうした遊覧の楽しみをより一層増幅させている。

建安では、他に立身出世し、不朽の名声を残す大志を詠う。建安七子の一人である陳琳の「遊覧詩」を例とする。

(前略)

嘉木凋綠葉  
芳草織紅榮  
騁哉日月逝  
年命將西傾  
建功不及時  
鐘鼎何所銘  
收念還寢房  
慷慨詠墳經  
庶幾及君在  
立德垂功名

かほく りよくよう しほく  
ほうぞう こうえい ほぞ  
は じつげつせい  
ねんめい まさ にし かたむ  
こう た およ  
しょうてい なん めい  
おも おさ しんぼう かえ  
こうがい ふんけい よ  
こいねが くん いま およ  
とく た こうみよう た  
徳を立て功 名を垂れんことを

秋遊に出かけ、「高き城」に登り「園庭」を眺め、発せられた感慨の部分である。「嘉木」「芳草」は枯れ、「日月」は馳せ行き、自らの命も尽きようとしている。

儂い生命、流れ行く時間を苦痛なものとして強く意識することは、前掲の古詩及び曹丕の作品と共通する。しかし、その理想とする生き方が異なっている。これまで見てきたような快樂に時間を費やすのではなく、ここでは、書物を読み、「徳を立て」、歴史に名を刻むことが願われる。時間は絶えず流れ、変化を齎す。そのため、遺される不朽の名声が思われたのである。

「美酒」を飲み、「燭を乗り遊」び、「榮名」を願ひ、不朽の名声を求める、「古詩十九首」及び建安詩において詠出された生き方は、いずれも過ぎゆく時間を強く意識するところに生まれている。これらの作品において、主人公が生きる「場」を振り返ることはなく、苦悩の対象として、時間の推移に専ら焦点が当てられている。

#### 四、

従来の詩の多くが詠う苦悩は、時間の推移を意識するところに生まれている。「詠懐詩」においても、流れゆく時間に対する認識はそれとは異ならない。しかし、「詠懐詩」において、時間から齎された苦悩は、時間それ自体に帰するのではなく、時間に覆われている主人公が生きる「場」全体の居心地の悪さや嫌悪感に収れんされるように見受けられる。最もよく表われている前掲「詠懐詩」其三の前半八句をもう一度ここに挙げよう。

嘉樹下成蹊	嘉樹	下に蹊成す
東園桃與李	東園の桃と李	
秋風吹飛藿	秋風	飛藿を吹けば
零落從此始	零落	此従り始まる
繁華有憔悴	繁華に憔悴有り	
堂上生荆杞	堂上に荆杞を生ず	
驅馬舍之去	馬を驅りて之を捨てて去り	
去上西山趾	去つて西山の趾に上る	



第一、二句と第五、六句は常套のフレーズ、既成のモチーフである。それに対して、第三、四句は独特な表現である。「秋風 飛藿を吹けば、零落 此従り始まる」というこの両句に、意識が向けられる対象が時間の推移から、いま自らが身を置く「場」全体に移ってゆく端緒を見てとることができるよう思う。

第四句の「此」とは、「秋風」によって「藿」が葉を落とすことを指す。「秋」は時間の推移を意識させる語である。しかし、ここでは、時間の推移によって齎された「藿」の変化は、そのみに止まらず「桃」「李」を含む万物の「零落」の予兆として位置づけられている。一つの点としての「藿」の変化は広がり、やがて一つの面を作っていく様相がここに表現されている。そのとき、時間による変化に晒される事物が織りなす一つの「場」が浮かび上がる。

第三句では、事物の移ろいの中に時間の推移を見ていたが、第四句では、時間の推移そのものというよりも、時間に飲み込まれるものとしての自らを取り巻く環境全体が意識されている。つまり、意識の中心が時間そのものから、「場」に移っているのである。この「場」は、時間の推移によって齎された不安定な「場」であり、第七、八句に詠まれた逃避の背後に意識された「之」と名指された「場」である。

「詠懐詩」においても、滔滔と流れる時間と向き合うことは苦痛なこととして捉えられる。しかし、それ以上に、苦悩の対象として「場」をより強く意識する。時間の推移は、主人公がいま身を置く「場」を負に塗りこめる要素の一つとして捉えなおされたのである。

「詠懐詩」における主人公が身を置く「場」は、嫌悪する事物、現象によって形作られている。同時にそれは、時間によって齎された不安定な「場」であり、時間によって齎された苦痛を収れんした「場」でもある。「詠懐詩」に詠われたのはこうした「場」からの逃避である。

## 五、

「古詩十九首」及び建安の詩との比較により、「詠懐詩」をめぐる特質を「場」からの逃避という視点から考察した。古詩及び建安の詩では、「美酒」を飲み、「執と素」を羽織り、「燭」を手に夜に遊び、「徳を立て功名を垂」る生き方に意が向けられた。流れ行く時間、あるいは生命の儂さを振り返ったのちに求められたものである。

「詠懐詩」で意が向けられた生き方は、いずれも主人公が生きる「場」から空間においてあるいは時間において距離をとったところに求められた。そこに詠われた苦悩は、古詩及び建安の詩のように時間の推移そのものからではなく、それを含んだ「場」全体から生まれている。

「詠懐詩」において、主人公はそうした「場」に泥むことはあくまでも峻拒し、ここからの逃避を求めて行く。作品中に繰り返し詠われた、逃避という行為、逃避したいという心的感情に関して、『三国志』裴注が引く阮籍に関する「慟哭」のエピソードが想起される。車に乗り、道に由らず、ただただ走る。行き止まりになるとひどく泣いて戻ってくる、という<sup>九</sup>。阮籍自身の行動として紹介された、自らがいる場から遠くへ離れようとすることは、「詠懐詩」に描き出された主人公の「場」から逃避しようとする<sup>一〇</sup>と重なって見えてくる。

正始という混乱した時代を背景に持つ「詠懐詩」において、主人公の置かれた「場」に意識が集中されたのは、政局が混乱した時代を生きた作者自身の、現実という「場」に生きざるを得ない苦みを表現が掬い取ったのかもしれない。

更にいえば、古詩や建安詩は現実のなかに自分たちの生き方を探ろうとした、一方「詠懐詩」においては、現実のなかに理想の実現の可能性を見出し得なかった。それゆえ「詠懐詩」の主人公は、上古、仙界、あるいは山中といった、時間あるいは空間において現実と距離を置いた、現実とは異なる世界に意識を向けざるを得なかった。建安詩はもとより、利那的な享楽に意を向けざるを得なかった古詩に比べても、生きる「場」全体を苦痛として捉えた「詠懐詩」の「憂生の嗟」はより深いものがあるといえよう。

「詠懐詩」に展開される独特な世界認識―時間及び空間が帯びる緊迫感、緊張感―も乱世を生きた阮籍の実感を書き取って完成された。後世において、「詠懐詩」が作者あるいはそれが生きた現実を強く印象づける文学として受容された所以をここに求めることができよう。そして、「詠懐詩」がそのように受容されていく過程において、一つの新たな文学スタイルを切り開くこととなる。第二部においてこのことについて改めて確認をしていく。

注

<sup>一</sup> 葉嘉瑩は『葉嘉瑩説漢魏六朝詩』（中華書局、二〇〇七年）において、「秋風」が「藿

を「吹」くことによつて齎される「零落」について、豆はいったん「零落」するとつる、根ともども枯れてしまう。たとえ、翌年また春が来たとしてもそこに「藿」が生ずることはないのである。ここに描かれた「藿」にみる「零落」はより徹底的なものである、と述べている。

二 『呂氏春秋』離俗覽「甯戚欲干齊桓公、窮困無以自進、於是爲商旅將任車以至齊、暮宿於郭門之外。桓公郊迎客、夜開門、辟任車、爝火甚盛、從者甚眾。甯戚飯牛居車下、望桓公而悲、擊牛角疾歌。桓公聞之、撫其僕之手曰、異哉。之歌者非常人也。命後車載之。」  
三 成玄英疏「緒、殘也。土、糞也。苴、草也。夫用眞道以持身者、必以國家爲殘餘之事、將天下同於草土者也。」

四 『史記』蕭相国世家「召平者、故秦東陵侯。秦破、爲布衣、貧、種瓜於長安城東、瓜美、故世俗謂之東陵瓜、從召平以爲名也。」

五 『莊子』に漁父篇があり、隱者の漁父と孔子の間答を引く。また、『楚辭』にも「漁父」の辞があり、「滄浪の水清まば、以て吾が纒を濯うべし。滄浪の水濁らば、以て吾が足を濯うべし」と歌う。

六 「古詩十九首」に関しては既に吉川幸次郎氏は「推移の悲哀—古詩十九首の主題—」（『中国文学報』第十四冊、一九六一）において、十九首の詩に普遍にあらわれているのは「人間が時間の上に生きることを意識することによって生まれる悲哀の感情である」と述べ、それを「推移の悲哀」と呼んだ。

七 『建安七子集』卷二

八 前掲吉川氏の『阮籍の「詠懷詩」について』において、「古詩十九首」と「詠懷詩」の両者が詠う時間の推移をめぐる意識の相違が言及されている。「詠懷詩」に見られる「人間の不幸を生むものとして、時間の推移を嫌悪する感情」は「従前の詩にも既に有力なもの」であり、既に「古詩十九首」においては「幸福の喪失の要素として、時間の推移が意識されている」という。また、両者の違いについて、「詠懷詩」のほうに「その裏づけとなる感情は、より深刻である」と指摘する。本稿では、吉川氏の見解を踏まえつつ、時間の推移に対する嫌悪とそれを取り込んだ「場」に向けられる意識に関心を置く。

九 『三国志』魏書「王粲伝」注に引く『魏氏春秋』に「時率意獨駕、不由徑路、車迹所窮、輒慟哭而反」。